

研 究

子どもの共感経験と親の共感経験および感情の言語化の関連

井上由紀子¹⁾, 塩飽 仁²⁾

〔論文要旨〕

本研究は、小学5年生から高校3年生までの2,421名とその両親を対象にして、子どもの両親に対する共感経験と親の共感経験および感情の言語化の関連を、親自身の被養育経験とともに検討することを目的とした。

その結果、両親の共感経験や感情の言語化は、被養育経験の影響を受けていた。また、小学生では、父親の共感経験が多いと子どもがもつ父親への共感経験が多かった。父親の感情の言語化がより適切であるほど、父親への共感経験は小学生男子では少なく、中学生男子では多かった。さらに、子どもがもつ母親への共感経験と、母親の共感経験と感情の言語化に関連はなかった。子どもの共感経験には、親の共感経験や被養育経験が影響している可能性が示唆された。

Key words : 子ども, 共感, 感情の言語化, 親子関係, 被養育経験

I. 緒 言

現代の子どもは他者に対して「わかってくれない」と不満を持っている。このような子どもの多くは、他者に理解してもらおうとする欲求が強く、自己中心的であるようにみえる。「共感」は、相手と同じ気持ちになったり、相手の立場になって考えたりできることである。他者への共感とは、相手の感情が自分の感情とは別のものであることを知り、伝えたい自分の感情は、相手側の解釈によって違ったものになるという理解を通して発達する¹⁾。また、共感の発達の变化を自己中心的なものから他者指向的なものへの変化として考えると、感情の成熟や言語の習得は、この変化を支える要因であると言われて²⁾。したがって、他者を独立した存在として認知して理解すること、すなわち他者への共感経験が重要であると考えられる。

子どもにとって、初めて自分以外の大切な存

在の他者（以下、重要他者）として意識されるのは親である。親の養育態度が子どもの心身の発達にさまざまな影響を与えていることは明らかであり²⁾、世代間で伝達される³⁾。この点からすれば、子どもの共感に影響を与える親の共感が、親自身が受けた養育態度と関係がある可能性が極めて高いと考えられる。

共感とは子どもの情緒の発達や対人関係と同様に、さまざまな重要他者との関係のなかで長い時間を経て発達していくと考えられる。児童期から思春期にかけては子どもにとっての重要他者が親から友人へと移行していくため、子どもの年齢や性別を考慮してその特徴を検討することが重要である。

これまで、子どもが共感する対象を「父親」、「母親」としてとらえた調査は全くない。子どもの共感について、親子間の影響の特徴を明らかにできるならば、子どもの共感の発達阻害要因を軽減もしくは予防することや、共感の発達

Parents' Empathy and its Verbalization has an Effect on Creating Children's Empathy

[1861]

Yukiko INOUE, Hitoshi SHIWAKU

受付 06.10.10

1) 東北大学病院（看護師）

採用 07. 2.28

2) 東北大学医学部保健学科（看護師/研究職）

別刷請求先：井上由紀子 東北大学病院 〒980-8574 宮城県仙台市青葉区星陵町1-1

Tel : 022-717-7000 Fax : 022-717-7016

を促進するために必要な援助方法などについての示唆を得ることができると考える。

よって、本研究は①子どもの両親に対する共感経験を検討すること、②親の他者に対する共感経験および感情の言語化の関連を、親自身の両親からの被養育経験とともに検討することを目的に行った。

II. 対象と方法

1. 対象

仙台市内にある小学校2校の5, 6年生408名, 中学校2校の全学年974名, 高校3校の全学年1,039名の児童・生徒と, その父親, 母親を対象とした。

調査は, 事前に各学校の校長に調査の主旨や方法などを説明して, 調査への協力を依頼し, 了承が得られた学校で留め置き法にて行った。

2. 方法

1) データ収集方法

調査は自記式質問紙を使用して行った。父親, 母親には, 既存の尺度を使用して, 他者に対する共感経験の程度と, 自分自身の感情を他者に言語化して伝えられる程度, さらに, 自身の両親からの被養育経験を尋ねた。子どもには, 父親および母親への共感経験の程度と自身の性別, 学年を回答してもらった。

倫理的配慮として, 対象者には調査の主旨や方法を説明した調査依頼文と調査用紙を同封し, 調査に同意する場合にのみ回答するよう依頼した。調査用紙は, 「子ども用」, 「保護者用(お父様用)」, 「保護者用(お母様用)」の封筒に入れて配布した。調査は無記名とし, 回収の際に他者に内容が漏洩しないようにした。調査は, 平成13年9月初旬から10月初旬に行った。

2) 使用尺度

(1) 父親, 母親に使用した尺度

① 共感経験尺度改訂版 (Empathic Experience Scale Revised: EESR) (以下, 共感経験)

角田⁴⁾によって作成され標準化された尺度である。角田⁵⁾は共感を「能動的または創造的に他者の立場に自分を置くことで, 自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること」と定義してこの尺度を作成している。この尺度は,

「相手の気持ちを感じられた」という「共有経験」と, 「相手の気持ちを感じられなかった」という「共有不全経験」から共感経験を測定している。先に作成された共感経験尺度 (EES) において, 「相手の気持ちを感じようとしたことはない」という他者への能動的な関与そのものを否定した質問を「相手の気持ちを感じなかった」という「共有不全経験」と位置づけ, 共感経験の一部としてとらえている。さらにこの尺度は, 同情と共感を区別するため, 共感経験を「共有経験」と「共有不全経験」の両面から測定していることが特徴である。20項目の合計得点から共感経験を測定し, 得点が高いほど共感経験が多いことを示す。

② Parental Bonding Instrument 日本版 (以下, 被養育経験)

1979年に Parker ら⁶⁾が作成した子どもからみた親の養育態度の自覚的評価スケールで, 両親の態度や振る舞いを care (以下, 養護的態度) と overprotection (以下, 過保護的態度) の2尺度に分類している。養護的態度が強いほど, 親が自分に対して愛情深く, あたたかい受容的な態度であったと評価していることを示し, 逆に弱いほど無関心, 拒否的な態度で接していたと評価していることを示すスケールである。一方, 過保護的態度が強いほど親が自分を幼児扱いし, 干渉的, 過保護的な態度であったと評価していることを示し, 弱いほど自主・独立を促されていたと評価していることを示す。Parental Bonding Instrument 日本版の信頼性, 妥当性の検討は, 小川⁷⁾によってなされている。

③ The Japanese Versions of The 20-Item Toronto Alexithymia Scale-20 (以下, 感情の言語化)

Bagby ら^{8,9)}が作成した The Twenty-Item Toronto Alexithymia Scale をもとに, 福西¹⁰⁾が作成し標準化した日本語版を用いた。これは, Shifneous が提唱した Alexithymia (失感情言語化症) を評価するための自己記入式質問票の1つである。Taylor はこれまでの Alexithymia の研究を総合して, ①感情を同定し表現することが困難である, ②情動覚醒時に感情と身体感覚の区別が困難である, ③想像活動が貧困である, ④外的な出来事を一方的に内的心象として認知する思考様式を示す, などをあげ Alex-

ithymia の自己記入式質問票として、Toronto Alexithymia Scale (TAS) を開発した。今回使用した尺度はこの TAS を修正したものである。20項目の合計得点を算出して評価し、得点が高いほど Alexithymia 傾向が強いとされている。

本研究では、Alexithymia の特徴の 1 つが「感情を適切な言葉で表現できない」となっていることに着目して、父親、母親の感情の言語化の程度を測定するために使用した。

(2) 子どもに使用した尺度

児童用共感経験尺度改訂版18項目 (児童用 EESR)

角田⁴⁾による共感経験尺度改訂版 (EESR) を児童期に適用できるように、橋本ら¹¹⁾が修正したものを使用した。児童用では、小学生にも分かるように表現をやさしく、やや説明的に修正している。18項目の合計得点を算出し評価するものである。得点が高いほど共感経験があることを示す。

本研究では、質問項目で使用されている共感の対象となる「相手」という言葉を「父親」、「母親」と設定したうえで、それぞれの場合について回答してもらった。

3) 分析方法

各尺度は規定の得点化を行った後に統計解析を行った。比率の差の検定にはカイ二乗検定、相関については Spearman の順位相関係数を求めて検定した。また、2 群の得点差の検定には Mann-Whitney の U 検定を、3 群以上の得点差の検定には Kruskal-Wallis 検定を用い、その後の多重比較は Mann-Whitney の U 検定に Bonferroni の不等式による修正を適用して行った。なお、分析の対象が 100 に満たない場合には、

正確な有意確率を算出する Monte Carlo 法をすべての検定に使用し、分析の信頼性を保持した。統計解析には Statistical Package for the Social Science (SPSS) 10.1J for Windows を使用した。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の属性と記述統計量 (表 1)

回答は小学生 263 名 (回収率: 64.0%)、中学生 126 名 (49.5%)、高校生 129 名 (52.7%) から得られた。小学生、中学生、高校生で、それぞれ男女の分布に差はみられなかった。

父親、母親の共感経験、被養育経験、感情の言語化の得点は、各尺度が標準化されたときの値と比べて、平均値や分布に大きな差はなかった。児童用 EESR の得点は標準化されたときの値がないため、全体的な分布の比較はできないが、学年や性別で平均値や分布に大きな差はなかった。

2. 親の共感経験、感情の言語化の特徴 (表 2)

1) 親の共感経験と被養育経験の関係

父親は自身の父親から過保護的に育てられたという思いが弱いと共感経験が少なく ($r = 0.11$, $p < 0.05$)、母親から過保護的に育てられたという思いが弱いと共感経験が少なかった ($r = 0.11$, $p < 0.05$)。また、母親の共感経験は自身の父親から養護的に育てられたという思いが強いと共感経験は少なく ($r = -0.13$, $p < 0.01$)、母親から養護的に育てられたという思いが強いと共感経験は少なかった ($r = -0.10$, $p < 0.05$)。

表 1 対象者の属性

	児童・生徒				両 親			
	男 子	女 子	不 明	合 計	父 親	母 親	不 明	合 計
小学生	123	121	19	263	209	246	2	457
中学生	68	56	2	126	126	126	0	252
高校生	75	54	0	129	129	129	0	258
合 計	266	231	21	518	464	501	2	967

数値: 人数 (有効回答数)

小学生、中学生、高校生における男子と女子の比率の差の検定: NS (カイ二乗検定)

表2 親の共感経験 (EESR) および感情の言語化 (TAS-20) と被養育経験 (PBI) の相関

		父親からの被養育経験 (PBI)		母親からの被養育経験 (PBI)	
		養護的態度	過保護的態度	養護的態度	過保護的態度
共感経験 (EESR)	父親	-0.07 (n=424)	0.11* (n=424)	-0.04 (n=423)	0.11* (n=426)
	母親	-0.13** (n=452)	0.04 (n=451)	-0.10* (n=455)	0.03 (n=456)
感情の言語化 (TAS-20)	父親	-0.24** (n=427)	0.23** (n=427)	-0.32** (n=425)	0.26** (n=428)
	母親	-0.24** (n=451)	0.21** (n=448)	-0.24** (n=454)	0.19** (n=454)

数値：相関係数, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$ (Spearman の順位相関係数の検定)

2) 感情の言語化と被養育経験の関係

父親は自身の父親から養護的に育てられたという思いが強く ($r = -0.24$, $p < 0.01$), 過保護的に育てられたという思いが弱いと感情の言語化がより適切であった ($r = 0.23$, $p < 0.01$)。また, 母親から養護的に育てられたという思いが強く ($r = -0.32$, $p < 0.01$), 過保護的に育てられたという思いが弱いと感情の言語化がより適切であった ($r = 0.26$, $p < 0.01$)。母親の場合は, 自身の父親から養護的に育てられたという思いが強く ($r = -0.24$, $p < 0.01$), 過保護的に育てられたという思いが弱いと感情の言語化がより適切であった ($r = 0.21$, $p < 0.01$)。また, 母親から養護的に育てられたという思いが強く ($r = -0.24$, $p < 0.01$), 過保護的に育てられたという思いが弱いと感情の言語化がより適切であった ($r = 0.19$, $p < 0.01$)。

3. 親子の関係 (表3)

1) 子どもの共感経験と親の共感経験の関係

小学生では, 父親の共感経験が多いほど子どもがもつ父親への共感経験は多いが ($r = 0.18$, $p < 0.05$), 母親の共感経験と母親への共感経験には関連がみられなかった。中学生, 高校生で親子間に関連がなかった。

2) 子どもの共感経験と感情の言語化の関係

小学生男子では, 父親の感情の言語化がより適切であるほど, 子どもがもつ父親への共感経験は少ないが ($r = 0.24$, $p < 0.05$), 女子では関連がみられなかった。一方, 中学生男子では, 父親の感情の言語化がより適切になると, 子どもがもつ父親への共感経験は多いが (r

$= -0.40$, $p < 0.01$), 女子では関連がなかった。また, 高校生では親子間に関連がなかった。

IV. 考 察

1. 親の共感経験, 感情の言語化の特徴

父親は, 自身の親から過保護的に育てられたという思いが弱いと, 共感経験が少ないことが明らかになった。過保護の態度とは, 逆の意味で自主, 独立をうながすと解釈されている⁷⁾。自身の両親から過度に自主, 独立をうながされて育てられたと子どもが感じるのは, 望ましいとは言い難く, 過保護的に育てられたという思いが弱いと共感経験が少ないという結果は, これを支持していると考えられる。また, 母親は, 自身の両親から養護的に育てられたという思いが強いと共感経験は少ないことが明らかになった。これまで, 養護の態度は強いほうが良いとされてきたが¹²⁾, 自身の親から過度に, あたたく, 受容的に育てられたと感じると共感経験は少ない可能性が示唆され, 共感経験には両親の養護の態度が強くなり過ぎないことが望ましいと考えられる。一方, 感情の言語化と被養育経験の関係をみると, 父親および母親が自身の両親から, あたたく, 受容的, そして自主, 独立をうながされて育てられたと感じていると感情の言語化はより適切になることが示唆された。

以上の結果から, 共感経験および感情の言語化は, ともに両親からの被養育経験の影響を明らかに受けていた。

父親の現在の共感経験には, 父親自身が受けてきた両親の過保護の態度が影響を与えており, 現在の小学生, 中学生, 高校生の男子の共感経験には, 両親の過保護の態度が影響を与え

表 3 子どもの共感経験（児童用 EESR）と親の共感経験（EESR）および感情の言語化（TAS-20）の相関

			親の他者に対する共感経験（EESR）		感情の言語化（TAS-20）	
			父親	母親	父親	母親
子どもの親に対する共感経験（EESR）	子ども全体	全体	父親に対する	0.11* (n=401)	-0.09 (n=402)	
			母親に対する		-0.02 (n=424)	
		男子	父親に対する	0.13 (n=229)	-0.08 (n=213)	
			母親に対する	0.02 (n=223)	0.02 (n=220)	
		女子	父親に対する	0.11 (n=185)	-0.10 (n=185)	
			母親に対する	0.07 (n=199)	-0.06 (n=202)	
	小学生	全体	父親に対する	0.18* (n=147)	0.05 (n=148)	
			母親に対する	0.10 (n=170)	-0.05 (n=170)	
		男子	父親に対する	0.16 (n=71)	0.24* (n=72)	
			母親に対する	0.08 (n=82)	0.01 (n=79)	
		女子	父親に対する	0.19 (n=74)	-0.11 (n=74)	
			母親に対する	0.10 (n=88)	-0.10 (n=91)	
	中学生	全体	父親に対する	0.10 (n=125)	-0.30** (n=125)	
			母親に対する	-0.01 (n=125)	-0.08 (n=125)	
		男子	父親に対する	0.16 (n=67)	-0.40** (n=67)	
			母親に対する	0.19 (n=67)	-0.10 (n=67)	
		女子	父親に対する	0.07 (n=56)	-0.23 (n=56)	
			母親に対する	0.21 (n=56)	-0.06 (n=56)	
	高校生	全体	父親に対する	0.07 (n=129)	-0.10 (n=129)	
			母親に対する	-0.01 (n=129)	0.08 (n=129)	
		男子	父親に対する	0.04 (n=74)	-0.15 (n=74)	
			母親に対する	-0.12 (n=74)	0.12 (n=74)	
		女子	父親に対する	0.14 (n=55)	-0.04 (n=55)	
			母親に対する	-0.18 (n=55)	0.04 (n=55)	

数値：相関係数, *p<0.05, **p<0.01 (Spearman の順位相関係数の検定)

ている可能性があることが考えられ、ある程度の両親の過保護的態度が必要であることが示された。また、母親の現在の共感経験には、母親自身が受けてきた両親の養護的態度が影響を与えているので、現在の小学生、中学生、高校生の女子の共感経験には、両親の養護的態度が影響を与えている可能性が考えられ、過度の養護的態度は望ましくないことが示された。

一方で、感情の言語化は、父親、母親ともに自身の両親の養護的態度が強いこと、過保護的態度が弱いことが良い影響を与えているため、現在の小学生、中学生、高校生の感情の言語化に対しては、両親の養育態度が良い影響を与える可能性がある。

2. 親子の関係

1) 子どもの共感経験と親の共感経験の関係

小学生において、父親の共感経験が多いと子どもがもつ父親への共感経験が多いことについては、児童期がエディプス後期から潜在期にあることで、それまでの親との緊張を克服するために、親を取り込み理想化し、同一視するという過程で、親の経験を自分の経験ととらえやすい発達段階であること¹³⁾が考えられる。中学生や高校生で親子の共感経験に相関がみられなかったことは、この時期の子どもの共感経験がすでに両親からの影響だけを受けているものではないということが推測される。さらに、母親と子どもの共感経験に有意な相関がみられな

かったことは、子どもが、母親との心理的距離が父親よりも接近しているため母親を客観的に他者と認識していない可能性があり、これが父親と母親の違いとしてあらわれたと考えられる。

2) 子どもの共感と親の感情の言語化の関係

感情を適切な言語で表現することは親においても子どもにおいても難しく、また、表現された感情を受けとめて理解することは、受け手側の言語能力にも影響を受けている¹⁾。Mahler¹³⁾の共生期の母子関係は原始的な相互の共感経験の連続と考えることができ、そのなかで乳児は非言語的な媒体から相手の感情に共感することが可能であると考えられている。小学生の共感経験はそれまでの非言語的な媒体がいまだ中心であるために、子どもが共感する能力を持っていたとしても、父親の適切な言語的表現に共感することは難しい段階なのではないかと考えられ、父親への共感経験が少ないと考えることができる。中学生男子で、父親の感情の言語化がより適切であると、父親への共感経験が多いことが明らかになった。これは子どもが成長・発達していくなかで、言語中心の共感能力を発達させた結果を示しており、より親の共感に近づいたためと考えることができる。高校生で関心がみられなかったことに対しては、高校生の共感経験が両親からの影響だけを受けていないということが推測される。

子どもの共感経験と母親の感情の言語化の関係で有意な相関がみられなかったことは、前項の親子の共感経験の関連と同様のことが考えられる。

3. 全体的考察と今後の展望

本研究では、子どもの共感経験は父親の共感経験および、感情の言語化と関係があることが示され、さらに、両親の共感経験および感情の言語化は自身の父親および母親からの被養育経験によって、それぞれ異なる特徴を持っていることが示された。これまで、子どもの心理特性や共感経験については、母親との関係が重要視され数多く研究されてきたが、今回の結果より、子どもと母親の関係と同様に、子どもと父親との関係についても詳細に検討していくことが必

要であるといえる。

父親の共感経験は自身の母親のみならず、父親からの被養育経験の影響も受けていることから、子どもの共感性を高めるために、父親の子どもへのかかわりの促進を考える必要がある。さらに、父親ならびに母親の、両親からの被養育経験が、子どもに影響していることから、親子関係を基盤とする対人関係が苦手な子どもの看護介入では、子どもの共感の特徴を理解し子どもへの直接的な介入を行うだけでなく、看護者が親の生育歴を理解したうえで親子関係を見直し、親自身への支持的、教示的介入を行うことや、養護教諭などと連携をとりながら親子への間接的な介入を行うなどで、より積極的かつ広範囲な親子への支援ができる可能性があると考えられる。

本研究において、結果の相関は強いものではなく、一般化して子どもの共感経験を捉えるには十分ではない。今後、子どもの共感経験に影響を与えている他の要因を検討し、研究を進展させていくことが課題と考えている。

謝 辞

本研究の調査の実施にあたり、ご協力をいただきました児童・生徒と保護者のみなさま、学校職員の方々に心から感謝いたします。

本研究は、平成13～16年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）（1）、課題番号：13672496、研究代表者：塩飽 仁）の助成を受けて行った研究の一部である。また、第12回日本小児看護学会学術集会にて発表した。

文 献

- 1) 菊池章夫：また／思いやりを科学する。東京：川島書店、1998。
- 2) 塩飽 仁、福井里佳：神経症患者の母子関係の特徴と看護介入による変化。日本看護研究学会雑誌 1997；20, 181。
- 3) 渡辺久子：母子臨床と世代間伝達。東京：金剛出版、2000。
- 4) 角田 豊：共感経験尺度改訂版（EESR）の作成と共感性の類型化の試み。教育心理学研究 1994；42：193-200。
- 5) 角田 豊：共感経験尺度の作成。京都大学教育

- 学部紀要 1991 ; 37 : 248-258.
- 6) Parker G, Tupling H, Brown LB : A parental bonding instrument. Br J Psychology 1979 ; 52 : 1-10.
- 7) 小川雅美 : PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究. 精神科治療学 1991 ; 6 : 1193-1201.
- 8) Bagby RM, Parker JDA, Taylor GJ : The Twenty-Item Toronto Alexithymia Scale- I . Item Selection and Cross-Validation of the Factor Structure. Journal of Psychosomatic Research 1994 ; 38(1) : 23-32.
- 9) Bagby RM, Taylor GJ, Parker JDA : The Twenty-Item Toronto Alexithymia Scale- II . Convergent, Discriminant, and Concurrent Validity. Journal of Psychosomatic Research 1994 ; 38 (1) : 33-40.
- 10) Fukunishi I, Nakagawa T, Nakamura H, Kikuchi M, Takubo M : Is Alexithymia a Culture-Bound Construct? Validity and Reliability of the Japanese Versions of the 20-Item Toronto Alexithymia Scale and Modified Beth Israel Hospital Psychosomatic Questionnaire. Psychological Research 1997 ; 80 : 787-799.
- 11) 橋本 巖, 堀内美佳, 森下典明 : 児童の共感性と友人関係における共有経験との関連. 愛媛大学教育学部紀要 教育科学 1996 ; 42 : 61-78.
- 12) 竹内美香 : 両親の養育態度と軽度精神症状— Parental Bonding Instrument の妥当性— . 精神科診断学 1990 ; 1 (1) : 91-100
- 13) Mahler MS : The Psychological Birth of the Human Infant. 1975. 高橋雅士, 織田正美, 浜畑紀訳 : 乳幼児の心理的誕生 母子共生と個体化. 愛知 : 黎明書房, 1994.